

## II 遺 跡

### 1. 遺跡の概観

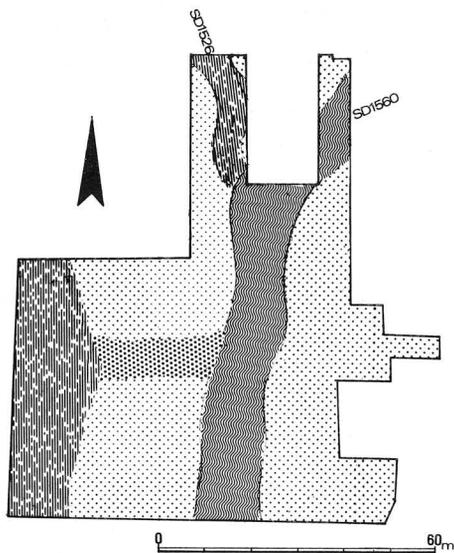


fig 8. 6AFI-PQ 地区地山

今回の調査で、奈良以前に北から南に流れる旧河川敷を、発掘区の西端に1条、中央部で2条（SD1526、SD1560）検出した。六坪の東北から中央部を南流するSD1560は、SD1526が廃絶した後の河川であるが、平城京造営前に、SD1526同様、自然堆積により廃絶する。園池は、この旧河川路（SD1560）を利用して造成されたものと考えられる。なお西端の旧河川は、埋め立てた後、奈良時代に2回の整地がみられた。上層は灰褐色粘質土、下層は灰黒色粘土である。

その他の地域は、ほとんど黄褐色粘土（地山）の上に、暗褐色粘土が堆積し、柱穴など大部分は、この層の上面から掘り込む。暗褐色粘土の上面の堆積は遺物を含む暗灰褐色粘質土、黄色粘質土（床土）、暗灰色粘質土（表土）の順になる。なお、発掘区の中央部に、西端の旧河川と中央部の旧河川の間に、巾10m位の黄褐色粘土の整地層がある。この層は、一部池の整地層にもなり、また、この上層からSB1510の柱穴の掘り込みがみられた。遺構面の上面を標高でみると、59m40前後で、北から南にかけて緩い勾配となる。

左京三条二坊六坪内に形成されたおもな遺構は、奈良時代初頭から末期におよぶ期間に属し、整地層や遺構の重複・配置などから大きく2期に区分できる。大規模な園池を坪の中心に配し、建物12棟、堀7条、井戸2基、溝8条、土壌などが坪心から一定の距離をもって計画的に配置されていることが知られ、京内敷地利用の一基準を示すこととなる。特に、園池西方の建物は、南北棟が多く、近年京内宅地の発掘で東西棟が大多数を占める知見と反するが、園池後方の東山を借景にとりこむ構想になっていることと関連しよう。またA期では、園池を、坪心より各70尺離れた四周の堀で取り囲み、他の部分と区画した利用であるのに対し、B期では、堀が取り外され、園池がより広い空間として利用されている。

なお、奈良以前の遺構として、前述の旧河川3条、溝数条があるが、以降の遺構については、遺構面が削平されたのか、園池廃絶後この地の利用がなかったのか、顕著なものはみられなかった。

- |                |                               |
|----------------|-------------------------------|
| 1. 耕土          | 2. 床土(黄色含砂粘土)                 |
| 3. 暗褐色土(遺物包含層) | 4. 黄褐色粘土                      |
|                | 5. 暗黄褐色粘土(SB1510検出面)          |
|                | 6. 茶褐色土(砂分含む)                 |
|                | 7. 黄色粘土ブロック混り<br>灰褐色粘土        |
|                | 8. 灰黒色粘土                      |
|                | 9. 茶褐色土(粘土分多い)                |
|                | 10. 灰褐色粘質土(整地土、<br>SB1540検出面) |
|                | 11. 黄色粘土ブロック入灰<br>黒色粘質土(整地土)  |
|                | 12. 灰色粘土                      |
|                | 13. 黒灰色粘土                     |
|                | 14. 青灰色粘土ブロック入<br>灰色砂質土       |

H:6000

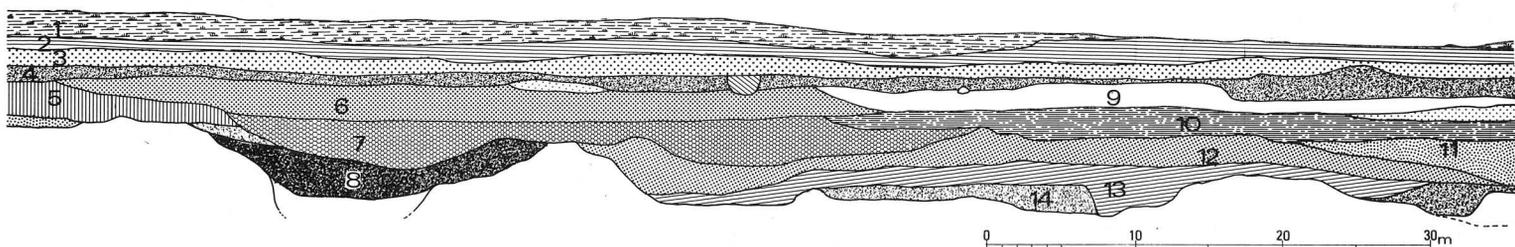


fig 9. 6AFI-P 地区堆積土層図

## 2. 遺構

本発掘区において検出した主な遺構は、予備調査、本調査合わせて、園池1、建物12棟、堀7条、井戸2基、溝8条、土壌などである。以下、まず坪の中心に位置する園池とその関連施設について述べ、次いで、園池と併存する堀・建物・溝・井戸などの順に遺構の説明を行なう。

**SD 1560**：平城京造営以前に、六坪の東北から坪の中心部を南に流れていた河川である。旧河川SD 1526が廃絶した後、流れていた河川で、北は導水路SD 1525下層に、南は排水路SD 1466下層に河川の堆積層を確認した。京造営時には自然堆積により廃絶していたが、園池SG 1504は恐らく、この河川路を利用して造成されたものと考えられる。

**SD 1525 (P.L. 6)**：園池に導水するための導水路である。園池同様旧河川路SD 1560を利用した巾4～7mの溝で、園池の手前で滞留し、木樋SX 1523により園池へ導水している。この導水路は、平城京造営時に、左京三条二坊の坊間路の道路沿いに、堀河の役目を持たせるべく造成された菰川に通じるものと思われる。菰川と導水路の接点には、水量調節の意味で堰のような施設が設けられたものと思われるが、今回の発掘ではその地点におよばなかった。なお、この導水路の堆積土下層より、造営時に廃棄されたとされる多量の加工木片と共に、「和銅」の年紀を持つもの他64点もの多くの木簡が出土した。

**SX 1523 (P.L. 8)**：導水路SD 1525より園池へ水を引く木樋暗渠である。木樋は、長さ5mの一木(巾12cm、深さ10cm)を凹型にくり抜き、上に木蓋をのせる。木樋の溝は先端(北端)では木口まで達せず止まっており、1mほど露出させて、導水は端近くで蓋をくり抜いた部分から上面で注ぎ入れる構造になっている。また取入口には、木樋の両脇に1mの間隔で、2本の小角柱(一辺15cm面取り)が検出された。導水のための関連施設であろうが、構造の詳細は知り得ない。なお、この小角柱掘方内に導水路の堆積土が見られたことや、木樋掘方が上面から見えないことから、SX 1523は導水路より後の施工によるものと考えられる。

遺構には一連番号を付して、その前にSA：築地・柵・土塁、SB：建物、SC：廊、SD：溝、SK：土壌、SX：その他、などの分類番号を標記する。

遺構の実測は国土方眼座標にしたがい、高さの基準は標高である。

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. 耕土                | 2. 床土(黄色含砂粘土)       |
| 3. 灰褐色砂質土(遺物包含層)     | 4. 茶褐色粘土(遺物多い)      |
| 5. 黒褐色粘土             |                     |
| <b>SD 1525堆積層</b>    |                     |
| 6. 暗灰色砂質土            | 7. 灰色粘土ブロック入灰緑色砂質土  |
| 8. 灰黒色粘土             | 9. 縞状砂含む灰黒色粘土(木片多し) |
| <b>SD 1560堆積層</b>    |                     |
| 11. 灰緑色砂質土           | 12. 暗青灰色含砂粘土        |
| 13. 灰緑色砂質土           | 14. 暗灰緑色粘質土         |
| 15. 砂礫               | 16. 砂礫              |
| 17. 縞状灰黒色粘土狭む砂       | 18. 淡黄色粗砂           |
| 19. 青灰色細砂            | 20. 縞状砂含む灰緑色粘質土     |
| 21. 青灰粗砂             | 22. 縞状砂含む灰色粘質土      |
| 23. 砂と灰黒色粘土互層        |                     |
| 24. 砂礫               |                     |
| 25. 縞状の灰黒色粘土を含む暗黄色粗砂 |                     |
| 26. 暗灰色粗砂            |                     |
| 27. 暗灰緑色粘土           |                     |
| 28. 灰黒色粘土            |                     |
| <b>SD 1526堆積層</b>    |                     |
| 29. 砂礫               |                     |
| 30. 灰色粗砂             |                     |

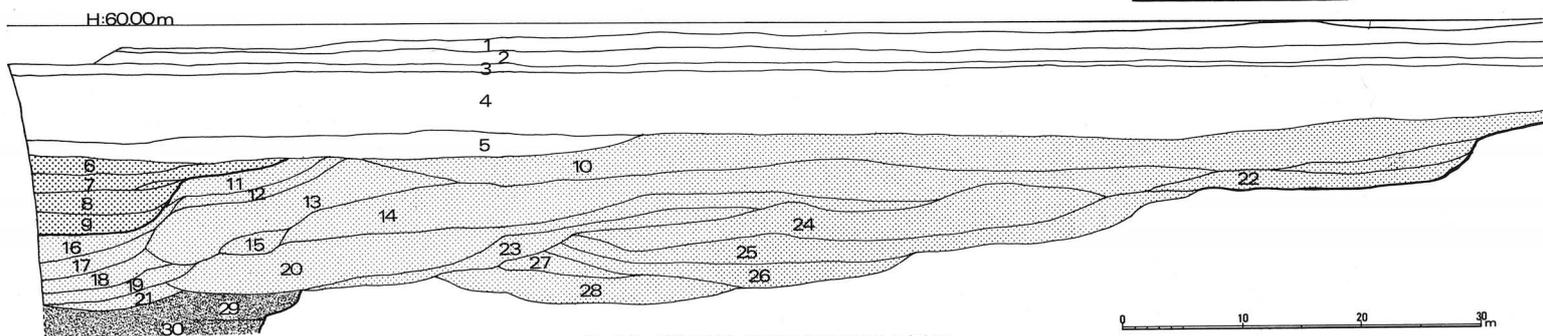
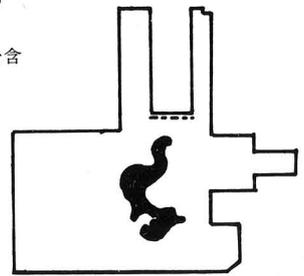


fig 10. SD1560.1525.1526 堆積土層図

**SG 1504**：園池は、平均巾15m、延長55mあり、池全体を石組で固め、曲池のような形で蛇行している。導水口、溢水口の高さから推定すると、水面は巾の広い所で5～6m、狭い所で2m、平均3m前後である。水深は、水面の広い所でもっとも深く25cm、平均20cm位の浅いものと考えられる。水際は、一部倒壊している所もあるが、全面玉石を一行に立てて据えつけている。水面は、この立石の中ほどを満たす。立石から陸に向かって5～6°のゆるい勾配で、巾20cm前後の偏平な玉石を敷きつめている。玉石に続き、池の周辺には、こぶし大の礫を並べ地表を保護している。玉石・礫とも、曲部あるいは水面が狭くなる部分で、巾広く敷きつめている。また、底石の欠損している箇所で見ると、池底は全面粘土で覆っているものと思われる。庭石は、水蝕ある褶曲を持つ石英質片麻岩を水辺に、花崗岩、一部安山岩などを陸に使用し、池汀の変化する突出部や湾曲の開始される点などに集中して配置し、自然順応の趣きをみせている。特に西岸の最初の突き出し部で、突き出した石組をうける形で岩島を

**1) 園池に使用された岩石** (庭石・玉石・礫)  
縞状片麻岩(両雲母片麻岩)、花崗岩類、塩基性変成岩類(変輝緑岩)、三笠安山岩、ホルンフェルス、チャート、流紋岩質火砕石類(石英斑岩)などで、基本的に奈良盆地東縁部地域で採取可能なものばかりである。

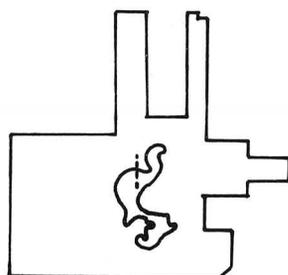
種類	出土部位	数量	習性	万葉植物名
クロマツ① Pinus thunbergii PARL.	球果	61	常緑針葉喬木(食用)	松、待、麻都
モモ Prunus persica BATSCH	核	5	落葉広葉喬木(食用・薬用)	桃
ウメ② Prunus mume Setz	核	2	落葉喬木(薬用)	宇米、有米、梅
センダングラ Melia azedarach L.	核	7	落葉喬木	相布・阿布知
"	種子	3	"	安不知
ヒルムシロ Potamogeton distinctus BENN.	果実	1	多年草(水生植物)	多波美豆良
ヘラオモダカ Alisma canaliculatum A.Br. et Bouche	種子	1	多年草(水生植物)	
ウツギ Deutzia crenata S. et Z.	蒴果	9	落葉灌木	宇能波奈
ゴキソル Actinostemma lobatum Max.	種子片	3	一年生つる草(水辺植物)	

Tab 2. 園池出土の植物遺体

**2) 園池堆積土の花粉分析**

園池最下層の堆積層、灰黒色粘土に花粉胞子化石がきわめて多く含まれていた。特にPinus(マツ属) Cryptomeria (スギ属)が多く、また水生のPercicaria(タデ属) Gramineae(イネ科)や、Picea(トウヒ属) Tsuga(ツガ属) Quercus(コナラ亜属) Fagus(ブナ属)など約40種類におよぶ。なお、池の埋土の灰褐色粘土層では、マメ科のアズキ、ゴマ科のゴマ、タデ科のソバ、アブラナ科の一種など、当時の栽培植物の花粉化石が認められた。

※ この番号は7頁下段の関連文献番号を示す。以下同じ。



1. 黄色バンド
2. 暗褐色砂質土
3. 暗褐色粘質土
4. 黄褐色斑入り灰褐色粘土
5. 灰黒色粘土(種子・核含む。)

H:6000

中に配した点や、岩島と池中央部東岸の石組がともに、池に向って氣勢を示すよう斜めに据えられている点など興味深い。なお池(Tab-2)中の堆積土は、底石の上に20～30cmの厚さで種子・核を含む灰褐色粘土がある。この層は、導水施設から流入したものでなく、池を使用した時期に自然堆積したものと思われる。また、この灰褐色粘土の上層には、厚さ30～40cmの黄褐色斑入り灰褐色粘土が、池の埋土としてある。この層に含まれる、土師器、瓦などの編年から、園池の廃絶は、奈良末期に比定できる。(P.L. 10.11.12.13)

次に池の中の細部意匠をみてみると、

**SX 1524**(P.L.11)：池の北端にある東西6m、南北1mで、50～60cmの立石で囲んだ石組遺構。立石は、西側では抜き取られているが、木桶暗渠により流入した水を、いったん滞水浄化させた後、上水を池へ導水するための施設と考えられる。

**SX 1468**(P.L.11)：池縁から直角に陸に向かって、両側に玉石を巾1.2m、長さ4mで並べる。これはSB 1470にも近接していることから、後世の舟入りの施設を思わせる。しかし、池全体の水深や、この部分の水深が10cmに満たないことから、実用には供し得ないものと考えられる。

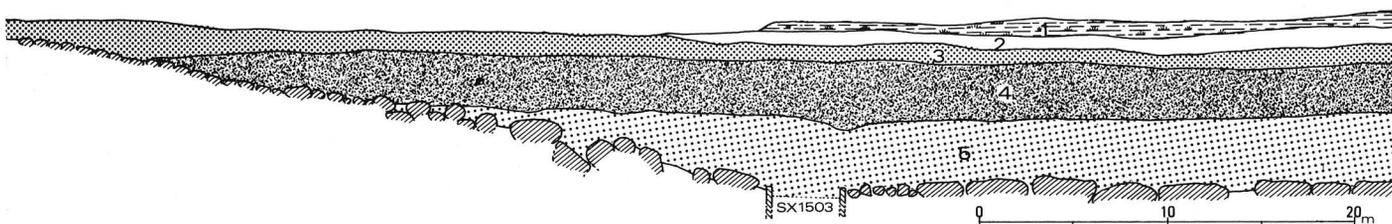


fig 11. 池堆積土層図

**S X 1503 (P L. 9)** : 池庭に木組で仕切りを拵えたもので、底板を4枚敷き、その上に側板(長辺80cm、短辺30cm)を柵で直に組み合わせたものである。側板の上面に柵穴があり、もう一枚上に組み合わせたものと考えられる。側板は2枚つなぐと、高さは30cmとなり、底石より10cm高いが、木組自体は水面下になる。この施設は、水際に位置することや、花粉分析の結果を考えると、木組の中に土を入れ、水生植物の栽培に使用されたものであろう。

**S X 1463 (P L. 9)** : S X 1503と同様の施設で、底板3枚の上に側板を2段組み合わせている。S X 1503と異なり側板は直交せず、斜めに据えている。また側板の損耗がひどく、側板上面の柵穴は確認できなかつた。

次に池の排水をみると、園池南辺で壁状に、岸に沿って一例に並ぶ立石の間から、溢流する溝(S D 1465)と、池底から木樋暗渠(S X 1464)によって排水される溝と2種類ある。

**S D 1465** : 池の南端西よりに階段状に石を罫んだ溝で、池から溢流する水を、排水溝S D 1466に導く溢水溝である。

**S X 1464 (P L. 8)** : 溢水部の下に貫通する、外法寸法20cm×20cm、長さ2.5mの木樋で、排水溝S D 1466に開口する。構造は取入部の木樋と同様、蓋先端部に径12cmの丸い穴を穿っている。なお取入部木樋蓋と、S X 1464の蓋の高低差は約30cmである。

**S D 1466** : 池の溢流水と、木樋(S X 1464)から流れ込む水を受けて南へ流す排水溝である。巾7尺(2.1m)で、両側に径20~30cmの玉石で一段護岸している。

以上、園池は、その形状、水深および関連施設などから判断すると、観賞と同時に曲水宴などの行事雅宴に利用できる実用面が両立したものであると思われる。因みに、池底の勾配は、取入口と溢流口で $\frac{1}{300}$ 取水口と排水口で $\frac{1}{50}$ になる。また、池の堆積層が薄いことや、土器の出土量が少なく、小片がほとんどであることから池は常に清掃されてきたか、池に水をはって使用された期間が行事・雅宴に限定されたものかも知れない。

今回検出の園池の技法など関連記事を奈良時代の文献資料より、また平安時代の作庭の基本的な理念と技法を記した作庭指導書「作庭記」にみると、下記のようなものがある。

- ①「松影の清き浜辺に玉敷かば君きまさむか清き浜辺に。」(万葉集・巻19、天平勝宝4年11月8日、在左大臣橋朝臣宅)
- ②「梅の花咲き散る春の永き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも」(万葉集・巻20、天平宝字2年2月 式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅に宴する歌)
- ③「壬午 於宮西南。新造池亭。設曲水宴。……」(続日本紀卷24、天平宝字6年3月の條)
- ④「天平二年三月丁亥。天皇御松林宮。宴五位以下。引文章生等令賦曲水。…」(続日本紀卷10)
- ⑤「対曲裏之双流……林亭問我之客去来花辺。池台慰我之賓……」(懷風藻、正三位式部卿藤原朝臣宇合。五言暮春曲宴南池并序)
- ⑥「……対酒当歌。……一曲一盃。……烟霞蕩而满目。園池照灼。桃李咲而成蹊……」(懷風藻、從三位兵部卿兼左右太夫藤原朝臣麻呂 五言。暮春於第園流置酒。)
- ⑦「大河のようは、そのすかた竜蛇のわけるみちのこことくなるへし。先石をたつることはまつ水のほかれるところをはしめとして、おも石のかとあるをたてて、その石のこはんをかきりとすへし」(作庭記)
- ⑧「池はあさがるへし。……池をは常さらさらふへき也。」(作庭記)

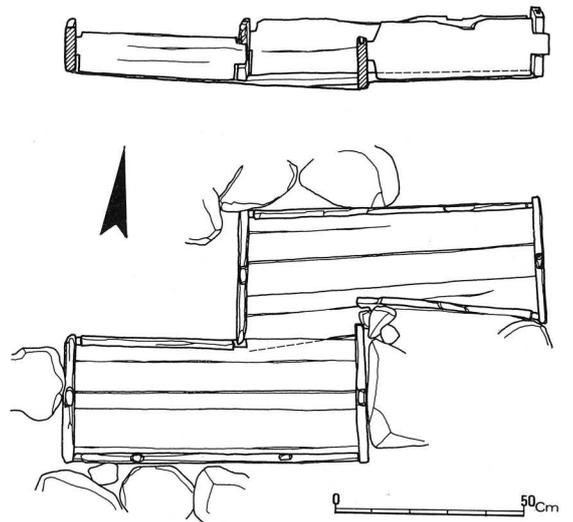


fig 12. SX1503平面・断面図

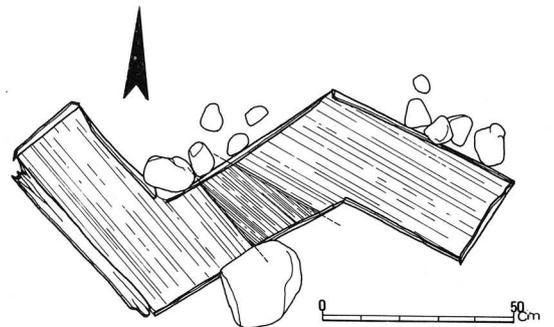
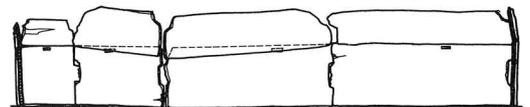


fig 13. SX1463平面・断面図

次に、坪心より各70尺に位置し、園池を画する四周の塀と園池西方の建物について説明する。

**S A 1500 (P L.5)**：東西方向の塀で、園池北部の石組遺構 S X 1524をはさんで15間分検出。柱痕跡をよくとどめ、南北方向を長辺に1mのほぼそろった方形の掘方を持っている。柱間は7尺を基本とするが、西端から2間目は10尺を超え、ここに門を開いていた可能性がある。園池西方部分、東端の柱掘方は、園池周辺のバラス敷きを取り除いて造られており、園池と一体となった造営計画がうかがわれる。

**S A 1538**：S A 1500の延長と考えられる塀であって、S B 1540の北側柱列に重なって、その下層から検出した。S A 1500の西端まで、6間分であるが、柱間は10尺で多少の出入りがある。

**S A 1536**：北端はS A 1500にとりつき、南端は南北棟S B 1510の東側柱列につながる南北方向の塀である。S B 1510まで7間。北から4間分の柱間は8尺等間であるが、次の2間は9尺、S B 1510との間は13尺ある。柱掘方は長辺1mほどの矩形を呈する。

**S A 1473 (P L.5)**：発掘区の南端を東西に伸びる塀である。S B 1510の東側柱列の取り付けから東へ4間で、園池排水溝S D 1466に達し、S B 1470の東側柱列の延長と端をそろえて終わる。排水溝の対岸は、2条の素掘りの東西溝、S D 1451、1453に挟まれた道路S X 1559に比定される部分にあたり、柱穴の検出を見ず、この塀は排水溝をこえて、東へ延長することはない。柱掘方は、おおむね南北方向にやや長い一辺70~80cmの方形で、中に軒平瓦(6667)を含むものがあつた。

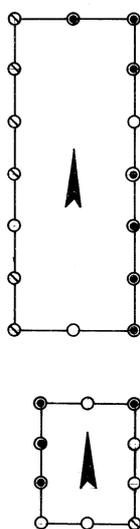
**S A 1483**：南北方向の塀で、掘方の状況などはS A 1500に類似している。S D 1453の南まで、18間分とすれば柱間はほぼ7尺等間になる。柱痕跡をとどめる4間分の小穴S A 1455が、やはり7尺等間で重複している。この塀と園池の間の中7~15mの区域には、遺構の検出はなかつた。

**S B 1510**：桁行6間・梁行2間、柱間10尺等間の掘立柱建物である。掘方は一辺1mの正方形であり、南から2間目の中央柱筋に、やや小さい掘方の柱穴があつて、仕切りとみられる。東側柱列には、一様に径30~40cmの柱痕跡があり、これに対し西側柱列は建物の外側へ向けての、掘方から西に張りだした柱抜き取り穴が明瞭である。

**S B 1505 (P L.5)**：園池の北西に、きわめて近く接して建てられた、梁行2間(8尺等間)・桁行3間(7尺等間)の南北棟建物である。東南隅の柱穴はS A 1500の場合と同じく、園池周辺のバラスを取り除いて掘方をつくっている。遺構の中央及び西側柱列近辺には多数の土壌があるが、いずれも柱穴より新しい。

建 物	棟方向	規模・庇	桁行m(尺)	梁行m(尺)	間m(尺)
S B 1470	N-S	5×2	11.8 (40)	4.8 (16)	-
" 1471	N-S	3×2	4.7 (15)	3.5 (12)	-
" 1472	N-S	3×2	6.3 (21)	4.2 (14)	-
" 1476	E-W	3×2,南	7.2 (24)	4.8 (16)	2.7 (9)
" 1505	N-S	3×2	6.3 (21)	4.8 (16)	-
" 1510	N-S	6×2	17.7 (60)	6.0 (20)	-
" 1540	N-S	6×2 四面?	17.8 (60)	6.0 (20)	3.0 (10)
" 1542	E-W	4×2	10.5 (36)	5.4 (18)	-
" 1550	E-W	3×2,南	6.3 (21)	4.8 (16)	2.7 (9)

Tab.3 6AFI-PQ地区主要建物一覧表



● 柱根 ● 柱痕跡 ○ 柱抜き取痕跡 ○ 柱穴のみ ◐ 推定

**S B 1470**：園池の南西に位置する、桁行5間・梁行2間、柱間8尺等間の南北棟建物である。東側柱列の北から2番目の柱穴は、後の深い土壌のために破壊されている。この東側柱の中央間へは、園池周辺のバラス敷きが伸びてきており、また建物前方は、園池につき出した半島のようにになっていることから、園池との密接な関連性がしのばれる。

**S B 1471**：桁行3間5尺等間、梁行は2間（6尺等間）の南北棟建物。堀方も小さく、東側柱列が、S B 1470の西側柱列と重複するが、この遺構の方が新しい。

**S B 1472**：S B 1471の南にある、桁行3間、梁行2間、7尺等間の南北棟である。北側妻柱は検出しない。S B 1471と西側柱列の柱筋をそろえ、同時期とみられる。S A 1473とは近接しすぎているため同時存在はないものと思われる。

**S B 1540 (P L. 5)**：桁行8間、梁行4間、柱間10尺等間の礎石建物と推定される建物である。建物北辺に、近世の磁器を含む土壌や野つばなどがあり、後世の攪乱が甚しく、根石または根石抜き取り穴が一部確認されたにすぎず、礎石は皆無で、基壇痕跡も確認できなかった。また、この地が軟弱な整地層のため、石群下には必ず、幅10～20cmの板が一枚あるいは数枚入れられていた。なおこの整地土中に奈良時代後葉の土器が多く含まれていた。

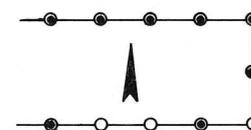
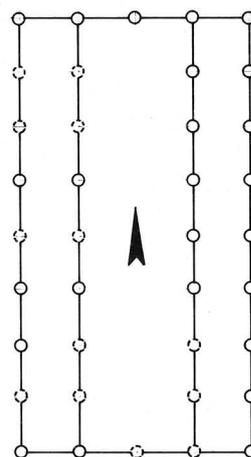
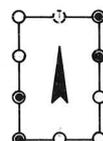
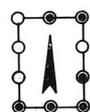
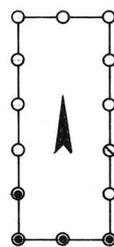
**S B 1542 (P L. 7)**：S B 1540の下層から検出した梁行2間、桁行5間以上の掘立柱東西棟建物で、柱間は9尺等間である。柱痕跡に炭化物を多く含んでいた。北および南の側柱列がS B 1540の北から2列目、4列目の柱筋で、柱穴の重複がみられ、S B 1540より古いことが確認できた。

**S B 1519**：発掘区の西端で柱穴を4個検出した。柱間は7尺で、西側に柱穴の断面があらわれており、いずれも耕土、床土、遺物包含層のさらに下層から掘り込まれている。S B 1510と同じ層位である。

**S B 1517**：S A 1473の西端に、10間目西でとりつくと思われる建物で、柱掘方はS A 1473よりやや小さい。発掘区の東西隅に、柱掘方を南北に2個（柱間10尺）検出、西壁面に1個（柱間10尺）確認したに過ぎない。

この東に接して、径1.5m深さ80cmほどの土壌S K 1516を検出した。瓦片が相当数出土している。

**S E 1511 (P L. 6 fig 14)**：発掘区の中央南端、S A 1473の南に検出した素掘りの井戸である。平面は径2mの円形で、遺構面より深さ1.7mを測る。埋土は暗灰色粘土で、面戸瓦や土器片を多少含んでいる。



- ①茶褐色粘質土
- ②灰褐色粘質土
- ③灰黒色粘質土
- ④暗黒色粘土
- ⑤青灰粘土混灰黒色粘土
- ⑥灰色砂土

H:59.60m

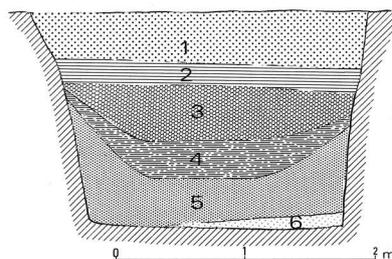


fig 14. SE-1511断面図

次に園池北方および東方の遺構について説明する。

**S B 1552 A, B** : 二つの東西棟が、ちょうど東西に1間分重なり合っていると考えられる。2棟とも梁行は2間、柱間は10尺であり、東西は発掘区の外にある。西側のA建物は、東西に長い1辺1mほどの柱掘方を持っている。東側のB建物は、柱穴の切り合いからAより新しい。柱掘方はAより小さく、かつ南北に長く1辺70cmほどである。

**S B 1550** : S B 1552の南部に重複する東西棟である。身舎桁行3間(7尺等間)・梁行2間(8尺等間)で、9尺の庇を持つ。身舎の西北隅、西南隅の柱穴には柱根が残存していた。西南隅の柱根の径は30cm余を測り40cm以上の長さをとどめる。

**S B 1476** : S A 1455の東に位置する東西棟である。身舎桁行3間・梁行2間、南面に庇を持つ。柱間は身舎が8尺等間、庇は9尺とやや広い。

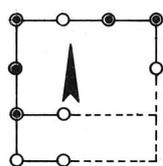
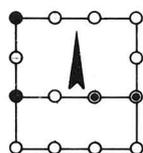
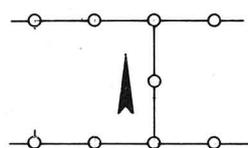
**S A 1557** : S D 1545の南に位置する東西塀で、柱間は4~5尺と小さく、柱穴も方20cm程度の小穴である。柱穴は1つを欠いて4間分検出した。柱通りはそろわないがS B 1550の北側柱から10尺北に位置し、この建物と関連するものと考えられる。

**S A 1554** : 上記の塀の南に位置する東西塀で、柱間は5尺、柱穴は浅く、長径40cm程のだ円形を呈している。4間分を検出したにとどまる。

**S D 1545** : 幅70~80cmの素掘りの東西溝である。溝底は西の方が高く、菰川流路の方向へ東流していたものと思われる。後述するように、六坪内で占める位置から見て、これを三条条間路に面する築地内側の溝に比定できる。また溝埋土は暗灰色砂質土で、この中に数点の軒丸瓦片が出土しているが、形式は判明しない。

**S E 1547 (P L. 6)** : 導水路 S D 1525の西方に位置する素掘りの井戸で径は2m深さは遺構面から3m弱である。底は灰青色の砂で、軒平瓦(6721-C)や土器片が堆積した状態で出土した。また上層の暗灰色粘土の埋土中には、奈良末から平安初頭の土師器杯や、軒平瓦(6663)、埴などが出土した。この井戸の南に、井戸を囲むようにバラスの堆積があり、やはり同様の埴が含まれていた。またこの井戸の東に、井戸の排水路と考えられる東西溝 S D 1546がある。

この他の遺構として、併行する2本の東西溝 S D 1453、1451より古い時期の斜行する溝 S D 1456、S A 1500と重複して走り S A 1500より古い時期の東西溝 S D 1527、斜行溝 S D 1532などがある。



- |                           |                          |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. 茶褐色ブロック混り<br>灰黄色粘土     | 2. 黒褐色粘土                 |
| 3. 淡灰黒色粘土                 | 4. 青灰色粘土                 |
| 5. 礫含む青灰色砂                | 6. 砂混り灰黒色粘質土             |
| 7. 淡灰黒色粘土混り砂<br>質土        | 8. 砂礫混り暗灰黒色粘<br>土        |
| 9. 暗灰黒色粘土                 | 10. 灰緑色粘土ブロック<br>含む灰黒色粘土 |
| 11. 淡灰黒色粘土混り砂<br>質土       | 12. 灰黒色粘土                |
| 13. 黒褐色粘土                 | 14. 青灰色砂混り灰黒色<br>粘土      |
| 15. 青灰色粘土ブロック<br>入暗灰色含砂粘土 |                          |

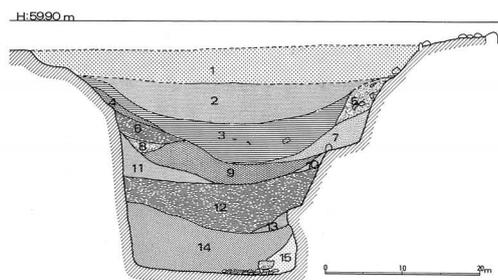


fig 15. SE1547 断面図

### 3. 占地と時期区分

#### a. 占地 (fig 16)

調査で検出した奈良時代の遺構が、平城京の条坊のなかでどのように位置づけられるか、また坪内の割付けはどのようにになっているかをみてる。

まず、六坪の東を限る二坊坊間路の心は、左京三条二坊十五坪で確認した坊間小路心から条坊計画によると450尺×0.295m=132.75mとなる。(基準尺0.295mは、平城宮39次調査の東一坊大路心の実測値と、86次調査の二坊坊間小路心の実測値の差400.239mを、朱雀大路の国土方眼方位に対する振れN15'41"Wの修正を加えた値、398.249mを条坊計画寸法1350尺で除した値。以下の数値は全て、振れを考慮している。)二坊坊間路心と、6坪検出の東堀S A1455間の距離を計測すると47.224m(÷0.295=160.08尺)の値を得る。また六坪の北を画する三条条間路心は、39次調査確認の二条条間大路心から、条坊計画によると1800尺×0.295m=531mとなる。三条条間路心と六坪検出の北堀S A1500間の距離を計測すると47.920m(÷0.295=160.305尺)の値を得る。

条間路、坊間路心から六坪内の北堀・東堀まで、それぞれ160尺の等距離にあること、また東西堀間(S A1455~S A1536)、南北堀間(S A1473~S A1500)がともに140尺であることから、条間路、坊間路の中員(溝心々)を40尺と推定すると、坪の計画巾(450尺)一小路½巾(10尺、86次、西隆寺調査で確認)一条間路または、坊間路½巾(20尺)=420尺となる。

坪の地割りを方420尺とすると、6坪内の東・西・南・北の堀が坪を、東西、南北にそれぞれ3等分することになる。また坪のセンターが、ほぼ園池の中心に位置することや、建物が坪の中軸線に、各堀に柱通りを合わせて計画的に配置されていることが判明した。

#### b. 6坪の時期区分

調査によって検出した六坪中心部の遺構は、他の調査済の京内遺跡に比べ、大規模な園池を坪の中心に位置するため量的に少なく、重複関係も少ないことが明らかとなった。このような遺構を時期的に分類すると、遺構の大部分は暗褐色粘質土面で検出し、整地層の違いなど層位による時期区分は多くみられないこと、また建物の重複関係も少ないことから、園池を中心にした、建物の規則的な配置関係、建物間隔を中心に時期区分を行なった。

その結果、大きくA・B2時期に区分することが出来る。(fig 17)

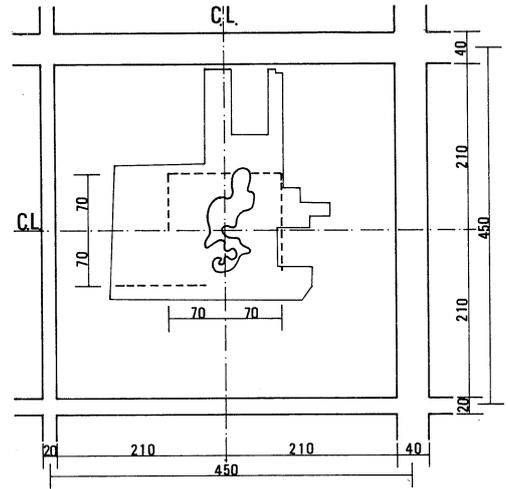


fig 16. 六坪の占地

地点名	X	Y	備考
東一坊大路心	-145757.263	-18054.064	39次調査 実測値
二条条間大路心	-145751.977	-18027.326	"
二坊坊間小路心	-146192.580	-17653.825	86次調査 実測値
朱雀門心	-145994.500	-18586.320	16次調査 実測値

Tab 4. 計測座標表

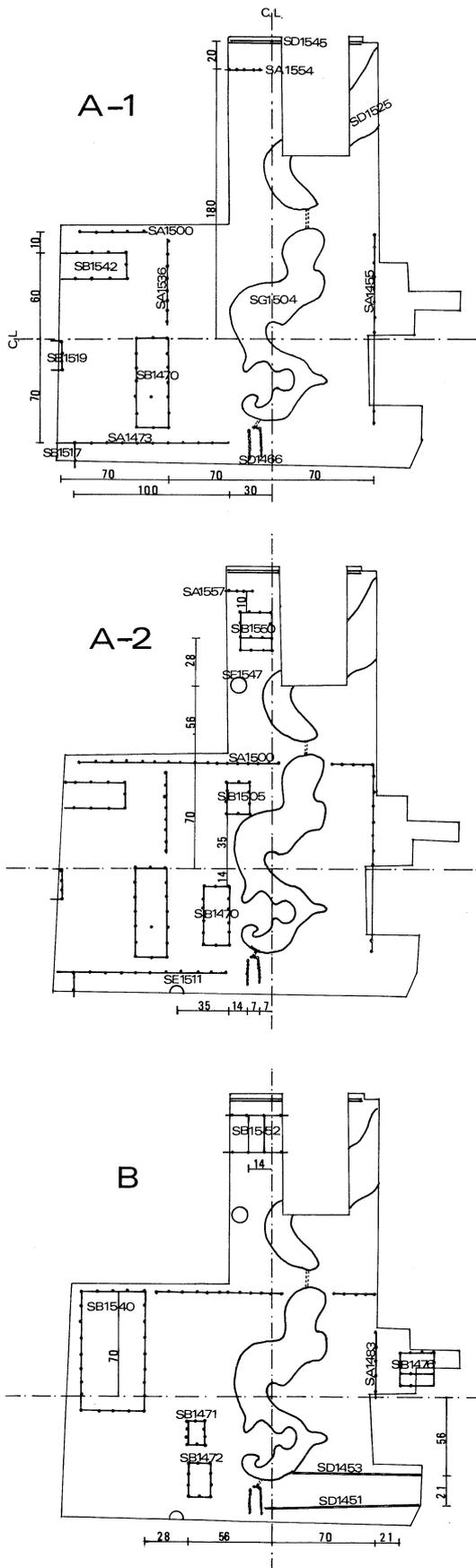


fig 17 六坪変遷図

**A期**：建物7棟、塀6条、井戸2基、溝2条、園池がこの期に属する。園池がまず坪の中心部に造成され、これを囲む形に70尺（7尺×10間）の等距離に、東、西、北、南の4塀が設けられる。SB1510、1519はともに北側柱を坪の東西中軸線にそろえ、南北中軸線より、それぞれ70尺（7尺×10間）、140尺（7尺×20間）西に位置する。SB1542は西側柱が発掘区域外となり確認できなかったが、東西5間と推定すると、南北中軸線より140尺に位置する。またSB1550の東側柱は南北中軸線にのり、南側柱は東西中軸線より84尺（7尺×16）西に位置する。南塀SA1473は南北中軸線より西30尺で始まり、この位置でSB1470の東側柱、SB1505の西側柱に柱通りをそろえる。また南塀は10間目（10尺×10間）でSB1517にとりつく。

A期のうち、北塀SA1500は7尺等間で方眼北に対し $N0^{\circ}11'27''W$ 振れるのに対し、南塀SA1473は10尺等間で $N0^{\circ}34'22''E$ と逆方向に振れることから、A期内でも2期の増改築が考えられる。因みに、南塀と方位をそろえて、10尺方眼で計画されているものを見ると、（A-1期）、SB1517（130尺）、SB1519（140尺）、SB1510（70尺）、SB1542（60尺）、SA1554（180尺）、SD1545（200尺）である。それ以外のものは全て北塀と方位をそろえ、7尺方眼の計画にのる。（A-2期）、特に7尺の計画は、建物、塀に限らず、溝（SD1451、1453、1466）、井戸（SE1511、1547）にも適用される。

この時期では、西塀SA1536の内側に南北棟SB1505、1470、1510の3棟が、園池を觀賞または使用する建物と考えられる。特にSB1505は池岸の石敷部に東南隅柱を立て、池台、池亭のような性格を持つものかも知れない。またSD1545は坪心より200尺に位置し、210尺の坪計画巾から考慮すると、坪を画する築地または塀の内側の雨落溝に相当する。

**B期**：この時期も前期の計画的な配置を踏襲し、北塀SA1500の後に、北側柱を合わせて、SB1540を中軸線から西84尺（7尺×12）の位置に造成している。また中軸線から西56尺（7尺×8）の位置にSB1471、1472の西側柱をそろえ、東91尺（7尺×13）の位置にSB1476の西側柱をそろえて、それぞれ計画されている。なおこの時期にはSA1455が取り外され、SB1476の目隠しにSA1483が造成されたものと考えられる。

この期の主屋は、今回検出建物の内、最大規模を持つSB1540で、主屋から園池が広く見渡せるよう、SA1536、SB1505は廃絶している。園池を含んでより広い空間として利用されている。

なお建物の柱穴の重複関係から、SB1542よりSB1540が、SB1470よりSB1471の方が、それぞれ新しいことが判明した。